



私の歩いた道

瀬戸山 充*

今回不肖私の皮膚科医として歩いた道(履歴)を寄稿してくれとのお話があった。もとより一介の皮膚科医に過ぎず、か細い道をとぼとぼと歩いてなんとか大学生活を定年で無事終わったときであったが、そのような生き方も何か後進の人たちの反面教師にでもなるかもしれないと請け負った次第である。

I. 少年時代

私は1947年(昭和22年)に宮崎県北諸県郡(現都城)の片田舎で生まれた。周りには自然があふれていて、春は鳥もちでのメジロ捕り、夏はホタル狩りと西瓜狩り(？)、秋は刈り入れの終わった田んぼで三角ベースボール、棒高跳びなど自然の中でときには怒られながら育った。そのような田舎であったためタヌキ、ヘビ、カエルなど小動物はもとより、種々の昆虫が身の回りにいた。昆虫を観察(昆虫採集ではなく)することが好きで、将来は昆虫学者などと考えていた。地元の高校に進学したが、医学部への進学を選択肢に入れたのは、眼科医だった長兄の勧めにもよるが、祖父が田舎医者であったことや生物学が好きだったことも後押しした。

II. 大学時代

1966年4月、鹿児島大学医学進学課程に入学

した。そのころはベトナム反戦運動や70年安保改定を前に学生運動が華やかなりしころで、革命的マルクス主義派(革マル、私の出身大学は全国有数の拠点であった。)や日本民主青年同盟(民青)のメンバーの熱いオルグを複数回受けたものであったが、何とかノンポリを守っていた。私の卒業年は1972年3月で、ちょうど学園紛争の終末期にあたる。その2月にはあの浅間山荘事件があり、連合赤軍もいよいよ追い詰められていたときであった。卒業試験の真最中であったが(このころの卒業試験は約2カ月間にわたり集中して行われていた)、1日中連合赤軍と警察官の攻防を、息を飲みつつリアルタイムでテレビ中継を見ていたのを思い出す。

無事卒業試験をパス、国家試験合格と同時に皮膚科に即入局した(図1)。恩師故・田代正昭先生はその年の4月から教授として皮膚科学教室を運営されておられ、即入局した私は一番目の弟子ということになった。なぜ皮膚科を一生の仕事として選んだか。とくに大きな理由がない。5年生の臨床修練(ポリクリ)時に、皮膚科医の先輩に情報収集を意図して声をかけたら、「では昼飯を食べながらでも」ということになり、ついて行ったところ当時の皆見紀久男教授(後に久留米大学医学部教授を経て福岡市で開業)と当時助教授だった田代先生がなぜか同じ食事処にいて「おまえ皮膚科に入るんだってな。まあ一杯飲め」といただいた焼酎で皮膚科入局となった次第である。人生の節目というのはこん

*Setoyama, Mitsuru (宮崎大学名誉教授)
社会医療法人青雲会病院顧問(〒899-5431 始良市西餅田3011)

なものかもしれない。

そのころは形態学的研究、とくに電子顕微鏡を用いた研究が華やかなりしころであったことも多少は影響したか、研修医としての1年目は病理学教室で外科病理を勉強しようということになり、皮膚病変を中心に、骨髄、消化器、乳腺などいろいろな標本をみせていただいたが、そうこうしているうちに大学院へ行くようにといわれ研修医2年目はスキップ、1973年4月に入学した。

Ⅲ. 大学院生時代

田代教授からいただいたテーマは“水疱症”であったが、当時の第二病理学教室故・徳岡昭治教授の教育方針はまず一般病理学の考え方をしっかり身につけ、その後テーマの研究を開始することであった。当時の第二病理学教室は教授以下の教員が助教授、講師、助手の4名、1年先輩の大学院生が1名、他教室からの研究生も数名おられた。病理解剖の当番は私を含め、数名が割り当てられていたが、当時は剖検数が多く(平均して年間300件ほどが剖検に供された)、結局大学院を終えるまで計30体の剖検をさせていただいた。病理解剖法の習得、臓器の取り扱い、マクロ所見会の準備と発表、病理標本の切



著者近影

り出し・パラフィン包埋標本作成、薄切、染色、病理組織診断、剖検輯報報告書作成までの一連の過程を自ら行ってきたことは新米院生にとっては大変な労力を伴う仕事であったが、この貴重な経験が私の皮膚科学研究者としての生き方に大変大きな財産となったのは言うまでもない。さらに外科病理診断(乳腺など女性器、消化器、軟部、皮膚組織病変が主)も任され毎日が充実した時間であった。

大学院1年生のとき、一外科医から送られてきたホルマリン固定標本が新しい研究テーマになった。それは1969年AFIPのJohnson & HelwigがEccrine acrospiroma(現在、アポクリン由来



図1 田代教授と医局員たち(1978年ごろ)(私本人はカメラ係)。



図2 大学院時代、鹿児島大学第二病理学の人たちと(後列右から2人目が当時の佐藤栄一教授)。

のものもあるとされる)として提唱した皮膚付属器腫瘍であった。ところが希有症のためなかなか症例が集まらず、県内の病理組織を扱う機関、九州大学、県立宮崎病院病理のご協力を得てようやく49例を収集、研究に当てることができた。また超微構造の検討においては新鮮材料がないためいわゆる戻し電顕を行ったが、そのころはダイヤモンドナイフがまだ一般的でなくガラスナイフを用いて超薄切片を作ったものである。1974年中途に徳岡先生は広島大学に転任され、後任として東北大学から佐藤栄一先生が教授として帰学された。言葉こそ優しいが、厳しい病理学的視点を持たなければ駄目と熱く指導されたものである(図2)。博士論文原稿は“細大漏らさず”を心がけたため、当初400字詰め原稿用紙で300枚ほどの大変長ったらしいものになってしまった。半分程度に削るよう指導され、現在のようにPCないしワープロのない時代、一夜では訂正原稿が完成しない有様であったが何とか投稿、論文審査が完了するまで約1年を費やし学位をいただくことができた。

IV. 出張時代

1年間(1978年4月～1979年3月)、奄美大島名瀬市(現在奄美市)にある県立大島病院に一人医

長として出張した。ほんの1年ほどしか臨床経験がなく、心細いというか心許なく冷汗をかきつつ診療したものである。未熟ながらも当時の自分をもっとも頼れる診断法である病理診断に供するため、あらゆる病変を片っ端から生検させていただいた。200件ぐらいになったろうか、自身で臨床所見と組織所見をつきあわせて検討したこの経験は、皮膚科臨床医としての訓練に大いに役立った。一方、人懐っこい地元の人たち数人とも知己になり、夜な夜な名瀬市の飲み屋街「屋仁川」に出張ったこともよい思い出である。田代教授の教室員によく言われたモットーは「よく学び、よく遊べ」であった。図らずも後者はよく実践していたことになる。

V. 第1回目の海外留学：ウェイン州立大学へ

1987年田代教授が主催し、事務局長を務めた第39回日本皮膚科学会西部支部学術大会も無事終わり、一度海外へ出て見聞を広めようと考えたが、つてがないため慣れない自己推薦の英文手紙を辞書を引き引き、汗をかきかき書いたものである。3通を用意したが、1通目の宛先はKen Hashimoto教授(1960年代から1970年代にかけての電顕を用いた皮膚の生物学的超微構造研究はこの人の独壇場であり、私の研究は彼の



図3 橋本会の皆さん(新潟大学主催)。前列右から3人目：橋本令夫人、4人目：橋本健先生

仕事にいつも突き当たった)であった。1回目の手紙で首尾よくOKの返事をいただき、それを受けて1988年7月14日関西空港から単身で米国デトロイトへ出発した。到着地デトロイト・メトロポリタン空港ではそれぞれご留学中の三重大学の谷口先生、鳥取大学の石原先生に迎えていただいた。そこからフリーウェイI-94を西に向かい、仮宿舍のモーターलについたが、当時米国は熱波の真最中で一面芝生が枯れていたのが思い出される。翌日、Ken Hashimoto教授のおられるデトロイト市内のWayne State University Hospitalへ挨拶に伺った。緊張して教授室のドアをノックすると“Yes”との返事が返ってきた。入ってみると気難しそうな顔ではあったが日本語で“いらっしゃい”。そこでやっとKen Hashimotoとは“橋本健”であり、新潟大学出身の日本人であることを知った(図3)。ごこない英文で依頼状、お礼状など書いていたのは何だったのかと改めて思ったものだ。兎にも角にもそのような形で留学生活が始まった。当時、Hashimoto教授の下には西ドイツ(当時はまた東西の分裂国家であった)、タイ、韓国2名、アルゼンチン、ルーマニアそして日本3名、計9名

の留学生が在籍していた。ルーチンワークのお手伝いをしながら、2つのテーマをいただいた。それは①新しいモノクローナル抗体TNKH-1の特徴を調べあげ臨床応用を考える、②抗デスモプラキンモノクローナル抗体を先天性、後天性の棘融解性病変に用いて、その局在を電顕的に検討する、の2つであった。帰国する9月末までに幸運にも共著も含め4本の論文をまとめることができた。

初めての米国滞在ではカルチャーショックとでもいうべき2つの驚きがあった。1つは電子顕微鏡用の超薄切片を作成するためのダイヤモンドナイフがダーマトームの載った机に5~6個無造作に置いてあったことである。日本国内ではとても高価で買ってもらえなく、手製のガラスナイフで四苦八苦していたのに、である。皮膚の超薄切片がこんなにも簡単に作れるのかと感激した。もう1つは探す文献すべてが施設内の図書館で見つかったことである。出身大学では探す英文文献がほとんど見つからず、イライラ、嘆息しながら国内の図書館に発注したものであり、米国の豊かさを思い知った。



図4 Cedars病院(現マイアミ大学病院)とKerdel, FA教授.

VI. 第2回目の留学：マイアミ大学へ

神崎保先生が2012年10月に3代目の鹿児島大学医学部皮膚科教授として着任され、より多面的に皮膚疾患を捉えようとする教えにわくわくしてきたころ、当時隣り合わせだったウイルス学講座教授の園田俊郎先生(この先生はHLA学の大家であり、HTLV-I感染症のとりえ方についてウイルス学的見地、免疫学的見地からご指導いただいた恩師)、神崎教授から「今度本学医学部とマイアミ大学医学部が姉妹校として学生交流をすることになった。ひいては先乗りしてあとから来る学生の面倒を見てくれないか」といわれた。HTLV-Iの流行地域でもあるカリブ海周辺を訪れるのも興味があり引き受けた。マイアミでの身元は血液内科のJohn J Byrnes教授、皮膚科のWilliam Eaglstein 教授が引き受けてくれることになった。1984年1月14日に関西空港からデトロイト・メトロポリタン空港経由でマイアミ空港に降り立ったが、南国情緒豊かなところで、パームツリーがやけに目立っていたのを覚えている。空港にはByrnes教授が迎えにきてくれていた、ところが待てど暮らせど機内預け荷物が降りてこない。どうなるのかなとおろおろしたが、教授は落ち着いたもので「そのうち

出てくるよ」(具体的な英語表現は忘れたが)であった。結局その日の荷物到着はなく、取り敢えず空港近郊に予約したホテルに投宿して待つことに。1日、2日と汗臭い服の「着た切り雀」生活が続いたが、3日目になって待ちに待った荷物がホテルに到着、ようやく新しい下着に着替え、ほっとしたものである。雑事を済ませ、4日目にマイアミ大学医学部のSylvester comprehensive cancer centerに行くと、「おい日本が大変なことになってるぞ。知っていたか?」とByrnes教授の同僚の准教授Harrington先生が聞いてきた。「えっ、何かありましたか?」。実は関西空港を出発した1日後に阪神淡路大震災がおきていたのである。このとき1989年のことを思い出した。前はサンフランシスコ経由で帰国したが、そこを発った3日後にサンフランシスコ地震があったからである。立つ鳥跡を濁す? 妙な符合に愕然とした。

それはさておき、その日のうちに皮膚科学教室へ赴いた。そこではWilliam Eaglstein主任教授が待っていた。開口一番「Do you remember me?」ときた。7年ほど前、故・安田利顕先生を通じて「米国の医師が鹿児島を来訪したいと言っている。ついては案内してくれないか」の依頼があり、案内を請け負った人がその人だったのである。世間は狭い。Eaglsteinという名前を覚えてはいたが、まさか本人だったとは!! 連れて行かれたのが大学に隣接したCedars hospital(図4)。そこで紹介されたのが皮膚科の准教授Francisco A. Kerdel先生であった。彼はdirectorとして主にレジデントの教育を担当していたが、毎週水曜日の病棟回診、staff meetingへの参加、構内にあるprivate outpatient officeでの診療見学、そして月1回のgreater round(開業医の生涯教育プログラム)、そしていくつかの講演会といろいろ私を連れ回してくれ、米国での皮膚科診療、研修のあり方など見学させてくださった。

マイアミ大留学の主たる目標は学生の面倒見と自らの見聞を広めることにあったが、以前からやりたかったHTLV-Iの組織内局在を可視化、



図5 宮崎大学皮膚科学教室の仲間たち(2013年).

証明することにチャレンジすることにした。HTLV-Iは感染細胞個々のDNA内にプロウイルスの形で1~2コピー組み込まれていることは周知のことである。したがって、可視化するためにはPCR法を用いてプロウイルスを増幅する必要がある。それまでin situ PCR法を用いた報告は皆無であり、類似の仕事としてはHIVに関するものが1報あるのみであった。そこでこの報告を参考に組織切片内でのHTLV-I増幅を試みた。大変な時間と労力を費やしたが、何とか可視化することができた。ウイルスが感染できる細胞は各ウイルスに固有のものがあり、限定されていると教えてもらっていたが、なんとこのウイルスは浮気者でリンパ球はおろか汗腺上皮、血管内皮細胞への感染も確認した。このことはHTLV-I保菌者の多様な症状の発現と他者への感染様式の多様性をうかがわせるものであった。

1996年3月に無事帰国したが、その折には天変地異はなかった。

VII. 宮崎大学時代(図5)

2000年12月宮崎医科大学へ赴任、前任の井上勝平教授の薫陶よろしきを得て、緒方講師(のち助教授)をはじめ、いずれも皮膚科医として研鑽された優秀なスタッフばかりで、とくに全身熱傷、重症皮膚感染症、皮膚悪性腫瘍、皮膚外科など診断学とケアを含む治療学には皆さん秀でておられて頼もしい限りであった。救急部からも診断を含む初期治療の的確なことから非

常に頼りにされていた。

赴任して4年目の2003年10月に旧来の宮崎大学と宮崎医科大学が合併、宮崎医科大学は宮崎大学医学部となったが、同時に入試担当の副学部長を命ぜられた。母校に残る卒業生があまりにも少ないこと、また宮崎県からの新入学生が少ないこと(その年は7人!)から、その対応策として宮崎県人を対象にした推薦入試の導入を画策した。いわゆる地域枠推薦入試である。県当局、教育委員会、進学校との折衝と教授会での決議、最終的には内閣府、文科省の指導を経て、100人の定員を一般入試で70人、一般推薦枠20人、地域枠を10人とすることになった。2005年から現在まで年40人前後の県出身者が入学するようになり、結果として本学各医局への入局者増が見込まれた。しかしながら2004年度から始まった“くだん”の新研修制度下で、さらなる工夫が必要となっている。

第59回日本皮膚科学会西部支部学術大会を2007年11月13日(土)、14日(日)の両日、「地域と皮膚病診療」をメインテーマに宮崎市のワールドコンベンションセンター・サミットホールで主催した。132題の一般演題をいただいたが、加えて海外から3名、国内から1名の招請、特別講演をいただいた。シンポジウムは「生物による皮膚症」、「外来のできる皮膚外科」の2本をもうけた。またこの会を明日の皮膚科をになう新進気鋭の若手の登龍門になればと、西部支部各県から1名ずつ選出していただき研究を披露して

いただいた。

日本皮膚科学会西部支部支部長として約3年間(2011年1月～2014年3月)西部支部のお世話をさせていただいたが、その間取り組んだものが文科省からの指摘もあった内部留保の適正化および日本皮膚科学会の公益法人化に対応しての西部支部の会員、各種委員会、既存地方会の取り扱いなどの関係規約と日本皮膚科学会定款との整合性の確立であったが、構成会員の全面的な協力と指導を得て大過なく仕事を終えることができた。

VIII. 青雲会病院顧問として

無事大学を退任してからは鹿児島県の片田舎

で桜島の火山灰に悩みながらも、一総合病院で週4日の外来診療を行っている。慣れない電子カルテに四苦八苦しながら、診療に携われることを楽しむ毎日である。

IX. 最後に

医師になってからのこの40年を振り返れば、決して偶然とは思えないたくさんの恩師に出会い珠玉の教えをいただいた。国内外の皮膚科学、病理学、ウイルス学、内科学の教授、准教授、スタッフの皆さんがそれである。ご指導に深く感謝しつつ、微力ではあるがそれを地域の患者さん、次世代に還元できればと考えている。

